

巻 頭 言

「2003年を振り返って」

化学科主任 中 田 雅 久

2003年は化学科、稲化会にとって特別な年でした。それは言うまでも無く化学科が30周年を迎えたということです。稲化会関係では、化学科創立30周年を機に稲化会会則の変更が行われ、“毎年度の早稲田大学理工学部化学科卒業生のうち成績優秀者”への「稲化会賞」授与が決定された、などの大きな動きがありました。

化学科創立30周年記念誌を読んでいただけばお分かりのように、化学科の設立と発展の裏には、教員、職員、そして卒業生の並々ならぬ努力と献身がありました。私は早稲田に赴任して以来、研究環境が改善されて然るべきである、と痛切に感じていますが、そのさらに原始的状况下において、悪戦苦闘しつつも研究・教育を続け、人材を輩出されてきた教員の方々の熱意には頭が下がる思いです。我々は、こうした化学科の設立と成長に尽くした先人の精神を継承し、化学科のさらなる発展に貢献することを忘れてはならないでしょう。

21世紀に入り、化学科がひとつの節目を迎えたかのように、多田愈教授が2003年度末で選定年により退職され、また、高橋博彰教授も翌年度末に定年退職されます。化学科を支え続けてきた両教授が相次いで化学科を去られるのは寂しい限りですが、化学科における研究と教育のさらなる発展に向けて、新任教員を加えた教員一同、これまで以上の努力を惜しまない次第です。

少子高齢化社会を迎え、日本周辺のアジア諸国が急速な発展をみせるなど、社会情勢、国際情勢は刻一刻と変化しつつあります。というよりは、むしろ今後の日本を考えると危機感を募

らせる状況ばかりが先に思い浮かびます。こうしたなかで、さらに国立大学の独法化が始まることもあり、私立大学を含めた各大学は生き残りに必死です。化学科も発展し続ける研究分野に対応でき、また、新展開を迎えつつある理工学部にも強力に貢献できる学科を目指し、学科の再構築を検討中です。

さて、早稲田大学理工学部は2007年に創立100周年を迎えます。これを機に大久保キャンパスに63号館を建設すること、また、理工学部・研究科の再編を行うことについて真摯な議論が続けられてきました。特に、理工学部・研究科の複数学部・研究科への再編は並大抵のことでは達成できないことは誰の目にも明らかですが、この創立以来の改革に理工学部は総力をあげて取り組んでいます。その詳細な進捗状況についてお伝えできないのは残念ですが、早稲田大学理工学部は創立100周年を迎え、なお着実に進化・成長し続けていることを稲化会会員の皆様には是非お伝えしておきたいと存じます。

以上のように、化学科も早稲田大学理工学部も大きな変革・発展の節目を迎えています。こうしたなかで、化学科の設立とともに発足し、同窓会組織としての役割を継続的に担ってきた稲化会の存在は大変貴重であり、その存在価値は年月を経ますますます高まるものと信じています。稲化会が今後、会員のための組織としますますます充実、発展し続けることを心より祈念する次第です。会員の皆様、どうかこれからも、これまで以上に稲化会をよろしくご支援くださるようお願いいたします。

化学科創立30周年記念特集

記念事業報告

平成15年5月10日（土）に、化学科設立30周年記念事業として、稲化会総会、講演会、式典、祝賀会が開催されました。

(1) 稲化会総会

午後1時から、国際会議場第1会議室、司会：伊藤紘一、参加者53名

議題

会計報告、会則の改正、稲化会賞の設立、新役員人事。

会長：長瀬 裕（第1期生）

副会長：鹿又宣弘（第9期生）

副会長：中田雅久（化学科主任）



(2) 記念講演会

午後1時40分から、国際会議場第1会議室、司会：阿部二郎（第15期生）、参加者96名

プログラム

講演1「グローバル競争時代の産業政策」三輪光太郎（中外製薬、第1期生）

研究室ポスター発表

講演2「脳-神経細胞の健康維持」濱登希子（三菱化学、第1期生）

講演3「なわとび分子のステレオコントロール」鹿又宣弘（明治大学、第9期生）





(3) 記念式典

午後4時から、国際会議場第1会議室、司会：古川行夫、参加者89名

式次第

来賓祝辞	総長	白井克彦
	理工学部長	足立恒雄
	工研委員長	大場一郎
	応用化学科主任	黒田一幸
謝辞	化学科主任	中田雅久



(4) 記念祝賀会

午後5時から、リーガロイヤルホテル東京ダイヤモンドルーム、司会：酒井健（第11期生）、参加者103名

式次第

- 開会の辞 化学科30周年記念事業組織委員会
委員長 高宮信夫
- 祝辞 早稲田大学名誉教授 加藤忠蔵
- 乾杯 化学科教授 高橋博彰
- 祝辞 応用化学科教授 逢坂哲彌
- 卒業生祝辞 平野秀樹（第1期生）
岡田修司（第6期生）
河野正規（第12期生）
伊藤邦孝（第24期生）
- 校歌斉唱 指揮 西郷富治（第5期生）
- 閉会の辞 化学科教授 多田 愈





設立30周年記念祝賀会



設立30周年記念祝賀会



(5) 「早稲田大学理工学部化学科設立30周年記念誌」の編纂

ご希望の方は、稲化会事務局 (mailto: touka-kai@chem.waseda.ac.jp) まで、郵送先住所をご連絡ください。宅急便 (着払い) で送らせていただきます。

(6) 「化学科学生表彰基金」への募金

寄付総額、638,000円。心から御礼申し上げます。現在、博士学位賞の記念メダルを作製しています。

以上、敬称略。

化学科創立30周年記念行事を省みて

早稲田大学名誉教授 高宮 信夫

化学科創立30周年記念行事は2箇所の会場を設けて行われました。2003年5月10日(土)午後1時から早稲田大学国際会議場第一会議室において稲化会総会、記念講演会、記念式典、が行われましたが、活気に満ちた盛大な会でした。また、午後5時からはリーガロイヤルホテル東京において記念祝賀会が開催され大いに盛り上がりました。

記念式典及び記念祝賀会には化学科教室教員、化学科卒業生の他、早稲田大学総長白井克彦教授、理工学部長足立恒雄教授、理工学研究科委員長大場一郎教授、応用化学科主任黒田一幸教授、前理工学研究科委員長逢坂哲彌教授、元理工学部長加藤忠蔵名誉教授、前理工学部長宇佐美昭次名誉教授他多数の来賓が参列されました。

また、30周年記念行事として化学科の記念誌を発行し当日参加者には配布しました。参加出来ない人には郵送費1,000円を支払いさえすれば無償で配布することといたしました。

記念誌については今後必要な卒業生にはいつでも配布できるような状態になっていますので、この稲化会報をご覧になって化学科あてに申し込んだ方には郵送する予定になっています。

今回の記念誌は化学科の歴史を回顧し、早稲

田大学のなかでの化学科の役割を再確認し、将来の発展を希求するよすがとして価値あるものと考えております。資料編のなかの卒業論文（第1回卒業生から2003年春の第27回卒業生まで全員）、修士論文（1978年度から2002年度まで）、博士論文（1981年度から2000年度まで）題目一覧は化学科の研究の記録として貴重なものと考えています。

思えば今回の記念行事は卒業生の活躍が目立ってきた時期にあたります。

第1回卒業生の長瀬 裕東海大学教授は稲化会会長でもありますので30周年記念行事開催についてまず協力をお願いしましたところご快諾を得ましたので、化学科教室の先生も大いに張り切って2001年11月10日に準備委員会を開催した結果、組織委員会、実行委員会、記念誌編集委員会を次々と組織しました。また事務局として現在理工学部技術職として勤務している第16回卒業生の松尾亜弓氏および第22回卒業生の押尾浩志氏にご協力をお願いしこれで準備は十分に整った次第です。

これらの関係した方々に改めてこの場を借りてその熱意と努力に感謝する次第です。

退任・新任

化学科を去るに当たって

多田 愈

“老兵は死さず、ただ消え行くのみ”

D. McArthur

“老兵は死さず、ただ消え行きもせず”

中曽根康弘

“我を知り、往くも往かんも、我にあり”

愈々庵

第一句は、よくも悪しくもわが国に民主主義を植えつけたマッカーサー元帥が日本を離れる時の辞、第二句はよくも悪しくも長期間首相の座に座り続けた中曽根康弘が政界を去る時の辞

である。前者の名言を引き継いだ後者のなんとも後味の悪い、無様な引け際であろう。第三の辞は詩作など経験のない著者の現在の心境である。雅号もこれからの余生への希望を込めたもので、今回始めて使う戯れものである。

人はみな自分の引け際を考えている。引き摺り下ろされるのと、自発的に退くのがあるが、前者は自分ではどうしようもない。難しいのは後者のほうである。化学科のように研究室の運営が完全に一人の教員によって行われている場合、それが可能な年齢は体力・気力の問題であり、人によって全く異なっている。研究（指導・論文書き）・研究室運営・学内行政（雑務）・学会活動を満遍なくこなして、始めて早稲田の教授でいられる。私自身は定年まで3年を残して今が限界と判断し、選択定年を選ぶことにした。まだやれるとお世辞を言ってくれる人はいるが、問題は、その間に自分の能力を自分で判断する能力を失う可能性を秘めていることである。かといって他人に無能を断定されるのも自尊心に傷がつく。今ならまだ自分で上の四つの義務がきついことを感じるができる。それなら今しかないというのが、ことの真相である。元極東軍司令官ほど格好よくはないが、元内閣総理大臣ほど無様でもないという心境を表したのが第三の句である。

わたしは1967年4月に早稲田大学に専任講師として赴任したので、この3月で37年間理工学部にお世話になったことになる。18階建ての51号館が数ヶ月間東洋一の高さを誇ったが、この竣工が私の赴任と時をいつにしている。あの建物は何度か補修をしたが、私は補修をしないで使い続けてきた。大分がたついてきたので、そろそろ使用目的を変えなければならないだろう。

思えば赴任時、化学科は存在せず、一般教育学科の化学担当であった。化学科が設立される予定で着任したが、折悪しく早稲田騒動が起り、さらに七年の歳月を費やさなければならなかった。自前学科の学生がいないので実験実習費もない、個人研究費だけの予算である。さいわい河上記念財団・松永記念財団・三島海雲財団・旭硝子財団などの支援を受け、応用化学科から派遣して頂いた1～2名の学生さんと、文

字通り一緒になって日夜頑張った。土曜日など学生のがールフレンドが来て研究室や図書室で読書し、学生さんの実験が終わるのを待っていた。私は早稲田に来る前にハーバード大学でポストドックをしていた。その時、この光景はごく日常的なものであったので何の抵抗感もなかった。がールフレンドのいない学生は彼女たちの持ってきてくれるお土産を楽しみにしていた。

私は有機天然物・有機光化学・有機金属化学・補酵素モデル・有機ラジカル反応の研究をしてきた。出席する学会・シンポジウムも天然物討論会・光化学討論会・有機金属化学討論会・生体関連化学討論会・ヘテロ環化合物討論会・ヘテロ原子化学討論会と10年以内に分野を変遷してきた。このように自由に分野を変えられるのも、各人我が城を持つ早稲田の特権である。我が城と言ったが、実は仕入れから売り台設置、掛け声まで一人でやる八百屋の親父である。実感から言えば、後者に匹敵するのが早稲田の教授である。上記の研究分野はそれぞれの最盛期を持っていた。その時代になると猫も杓子もその分野に集中することになる。仲間が多く、話が通じやすい、大きな本流に身を置くことによって、虎の威を借る狐にもなり得る。狐は自分を大きく見せるため、自分の研究が重要で化学史上大きな発見をしたような錯覚に陥りやすい。

しかし、私の巢は虎の巢にはなりようも無く、小さく貧弱なものであった。さらに、生来の飽きっぽさと、群れることが嫌で私は研究分野を次々と変遷することになる。何十年も同じ分野に留まれるほど辛抱強くは無い自分を知っているの、今思うと私は自分に正直であった気がする。

あと、思い起こすと化学科・大学院化学専攻の設立がある。今でこそ文部科学省も柔軟になったが、30年前は官僚の権益を守るため強固な枠を敷いていた。一番大きなハードルは用地問題であった。早稲田は敷地が足りないから一切の申請は受けない、というのが文部省の基本的態度であった。面白いことに、新設学部・学科は4年間、大学院は3年間その完成年度まで

は優秀な教員を加えたり、研究教育条件を改良したりすることも許されなかった。なぜなら、それはさんな計画を文部官僚が認知したことになるのだそう。早稲田の物理および応用物理学専攻では、一人の先生が、理学・工学でもどちらの学位でも授けることができる。文部省の担当官は、これは当時の担当官が間違えて認可してしまったが、これは既得権であるから剥奪は出来ないと説明し、当時としてはこれで正しかったという見解となる。化学専攻設立時、私は大学院教務委員として、このような文部官僚と交渉を重ねた一下手に出ながら攻防戦を行った。今となっては懐かしく思い出される光景である。

私と高橋先生が去れば化学科設立以前から在籍した第ゼロ世代は“死さずとも去り行く”ことになる。化学科の絶え間ない努力と発展を願ってやまない。

化学科に赴任して

柴田 高範

平成15年4月に化学科の専任教員として採用され、稲化会のメンバーになった柴田高範です。まず、私の前任地である岡山の紹介をします。

岡山と言えば「桃太郎」です。「桃太郎ぶどう」に始まり、駅前の大通りが「桃太郎通り」、最近国体用に建設された競技場が「桃太郎スタジアム」です。それに、晴天率が高いことも有名であり、「晴れの国、岡山」がキャッチフレーズです。実際に都道府県あたりの天文台の数が最も多い県だそうです。そのため、農産物、特に果物が美味であり、「白桃」「マスカット」がその代表です。また、瀬戸内海に面しているので、魚の種類が豊富であり、東京では見たこともない魚が店頭に並んでいます。香川県が近いのか、うどんが東京と比べて美味しく、逆に「蕎麦屋」は少ない気がします。都市の規模からは、隣県の広島には遠く及ばないものの、交通の要所であり、山陰、四国いづれに行くにも、鉄道は岡山を經由します。また、

大阪から新幹線で1時間でありながら、関西圏ではなく、野球チームも、阪神や広島より巨人ファンが多い、という不思議な土地柄です。

岡山市内にある日本三名園のひとつ「後楽園」は勿論のこと、「日本のエーゲ海・牛窓」や「西の軽井沢・蒜山（ひるぜん）高原」へも車で1時間足らずで到着でき、高速道路の入口まで1時間かかる東京とは違い、快適な生活です。そのせいか、岡山出身者には“I love Okayama”の人が多く感じられ、衆議院の全議席を自由民主党が独占する保守王国であることと無関係ではないように、勝手に思っています。

岡山大学は、岡山駅から車で10分という交通至便な所にありながら、半田山という丘の裾野に広大なキャンパスを持っています。野球場、サッカーグラウンド、ラグビーグラウンド、それに馬術練習用の馬場まであり、夜構内を歩いていると狸に出会うこともあります。また、農学部前の銀杏並木の紅葉は全国的に有名であり、NHK 定時ニュースの最後の映像として使われることもあります。

そのような岡山から、緑もなく、密集した町並みが続く東京に戻るとがっかりする反面、気分的には妙に落ち着く自分に気がつきます。生まれて以来30年以上生活している東京が、自分にとってはやはり「故郷」なのだと思いつきです。

ところで、稲化会のメンバーの共通点と言えば、期間の長短はあれ、「人生の一時期を化学に専心した」ことではないでしょうか。私は大学2年の時に化学を専門とすることに決めて以来、既に17年も化学とつき合っており、今後もつき合っていくつもりです。そのような人生となった起点を思い返すと、高校の先生の一言だと思います。あるとき化学の先生が、「液体酸素は、何色だと思う？」と質問され、よりによって私を指名しました。当時、液体窒素の存在も知らなかった私は、「酸素も液体になる」という驚きと、「何色？と聞くのだから、きっと無色ではない」と思い、適当に「青色」と答えました。すると先生は、「よく知っているな！その通り青色だ」と言いました。偶然当

ただただなのに、褒められた私は、すぐに化学が好きになりました。さらに先生は、酸素分子には磁性があり、液体酸素の液面が磁石で上がる映像を見せてくれました。その理由は大学に行けばわかるかもしれない、と思いました。

その後、当時薬学部の有機合成系の研究室の博士課程に在籍していた先輩に、化学を教えてもらう機会があり、「薬は有機化合物」であることを知りました。つまり、多くの薬剤が、海洋生物や樹木から抽出された正に「神からの贈り物」であること、しかしながら、その化合物の持つ副作用を減らし、より活性の強い化合物を創製することは、人間、つまりは有機化学者以外にはできない、と熱く語られました。そして、私は有機化学を専門とすることを決めました。

この二人に出逢わなければ、私は全く違った人生を歩んでいたと思います。早稲田大学理工学部化学科に入学する学生たちも、先生、先輩、あるいは本と出会い、少なからず「化学」にときめきを感じて化学科を選んだことと思います。我々大学教員は、その夢を大切に、育て、化学の専門教育を行うのが使命です。

早稲田大学に強い愛着を持っている卒業生は多いと思います。しかし、それ以上に今後重要なのは「愛学科心」だと思います。卒業生、在校生が、化学科をこれまでも増して誇りに思い、愛せるように、一教員として全力を尽くしたいと思います。

卒業生便り

大学へ転職して思うこと

第1期 長瀬 裕

2000年の春、私は長年勤めた（財）相模中央化学研究所を退職し東海大学工学部に勤務することとなった。すでに3年半あまりの月日が経っているが、この場を借りて稲化会の皆様にご報告申し上げたい。

この3年間はこれまでにない様々な経験をして、光陰矢のごとしの感もあるが、一方で振り返ってみると極めて長く感じる月日でもある。初年度は両方の職務を兼任した東工大大学院の客員教授まで引き続き兼務したこともあり、東工大と東海大の学生が相模中研の実験室で実験をしており、私は講義や会議の日は大学へ、ない日は相模中研へ足を運んで学生達と研究の打合せをするという日々を送った。極めて多忙ではあったが充実した時間を過ごせたように思う。もしその時今日は何処へ行きたいか?と聞かれたら、ここだけの話だが、相模中研と答えたであろう。試薬の匂いがする実験室の中で学生の出した結果を見ながら次はこうしてみようか、ああしてみようかと思いつくことに喜びを感じるの、長年研究所で暮らして染み付いた性癖であろうか。

その後2001年春に実験機材を大学へ移設し新たに研究室を立ち上げた。このご時世で大幅な規模の縮小を余儀なくされた相模中研から、使い慣れた多くの実験器具や装置を提供していただいたことには心より感謝している。それがなければ今の私の研究室はもっと閑散としているに違いない。その後毎年10人前後の卒研究生が配属され、今年は修士学生4人と学部生8人が研究室を構成している。卒論・修論発表を間近に控えて今の彼らの実験結果があるのもそれらの器具、装置のお陰である。大学へ移って一番苦労することは何かと言えば、やはり研究費不足であろう。学会でお付き合いいただいている先生方も異口同音にそうおっしゃる。稲化会員の中にも同感の方が多に違いない。大学から分配される予算だけでは到底良い研究はできない。何とか科研費や助成金をかき集めてお金がかかる立ち上げ時期を切り抜けたが、これから毎年研究費の獲得に奔走しなければならないと思うと……実に憂鬱である。

しかし、金は天下の回りもの。それは何とかするとして、研究所と大学の大きな違いは研究に携わる“人”の違いである。研究所はプロの研究員でグループが構成されるのに対して、大学の研究室で実験を進めるのはあくまで学生さんである。相模中研時代は化学科11期生の根本

君をはじめ優秀な人材に恵まれ研究のおもしろさを実感できたが、それはひとえにグループのメンバーのお陰であると思っている。逆に大学ではそうはいかない難しさをこの3年間で痛感している。大学では教育と研究を両立させなければならない。片方をおろそかにすると必ずもう一方にしわ寄せがくる。たしかに講義は多くその準備は煩わしいが、講義の時に学生に化学のおもしろさ、実験の楽しさを教え研究に対する興味を引き出しておく、研究室に配属されたときにそれを実践してみせてさらに関心を深めてやることのできる。根気のいる仕事ではあるが、そうやって人を育てていく喜びを感じつつある今日この頃である。私の研究室の修士第一期生は、4年前に相模中研の私の研究室に外研究生として東海大から配属され、その後大学院へ進んだため自動的に大学でも私の研究室に配属された。偶然とはいえ私にとって激動の3年間を毎日付き合ってくれた唯一のパートナーである。しかし、彼はその激動の年月の中で学会発表や論文の作成を数多くこなして大きく成長してくれた。2002年の春、彼はある企業の研究所に就職したが、必ずや職場でも活躍してくれるものと期待している。彼が卒業した後研究室はすっかり人が入れ替わり、来年度は修士も倍増して8人の大学院生と8人の学部生を抱える大所帯となりそうである。今後はその繰り返しとなるだろうが、一人でも多くのプロの研究員（になるかどうか不安もあるが……）を育てるべく、まずはマイペースを崩さずに地道な研究に取り組んでいく所存である。

社会を取り巻く環境も随分と様変わりしつつある昨今、大学の研究室あるいは個人が単独で成果を挙げるのは無理である。大学に限らずすべての職場でもそうであろう。そのような時代こそ力になるのは人と人との信頼関係であると思う。そういう意味で30周年を迎えた稲化会組織は今後も会員同士の絆を大切にしていける必要がある。「大学とは人間関係をつくる場所」という初代稲化会会長の関根吉郎先生の言葉を、大学に職を得た今、研究活動を通して実践していきたいと考えている。

(東海大学工学部応用化学科 教授)

あこのころから25年～今、 化学教育の現場から

第3期 若松 仁志

昨秋、ホームカミングデーに招待された。卒業後25年目だ。自分が、あこのころの倍以上の年齢になるなんて思ってもいなかった。化学科も創設して30年がたった。昨年5月の記念パーティでは、懐かしい面々に久しぶりに会った。あこのころ若者だった友たちも、今では、頭に白いものが混じり、顔に年輪が刻まれ……。自分も、いい歳になってしまった。

早稲田にあこがれ、化学が大好きだった僕は、1975年、早稲田を受験し化学科に入学した。3期生は17人と少人数だった。先生方には、大変熱心に指導していただいた。量子化学から、構造化学、無機、有機、物化、分析……。化学の中にも、いろいろな分野があることを知り、僕の興味は広がっていった。あこのころを振り返ると、苦しんだ科目もあったのだが、好奇心を刺激されたことばかりを思い出す。多田先生からワトソン・クリックの話聞いたのが昨日のここのようだ。また、他学科と一緒に授業も多かった。理物、量力、高分子、物性……。それらの講義の多くに、僕は知的興奮を覚えた。大学とは、知的刺激を受けるところなのだろう。在学中、多くの刺激をもらった。

卒業してすぐ、出版社に就職した。化学以外にも興味がひろがった結果だった。その後、いくつか職場は変わったが、13年間、化学とは無縁の世界で仕事をしてきた。14年目に、縁あって、高校で化学を教えることになった。久々に化学の世界に戻ってみると、住み慣れた我が家に戻ったような安堵感を感じる。自分には、やはり化学の世界の水が合っていたのだろう。そして、高校生に化学の面白さを伝えたいと思いい、教壇に立っている。かつて、自分が感じたように、知的興奮を味わって欲しいと思う。しかし、教えている現場では、それ以前のことが多い。知識だけが先行してしまい、現実から遊離しているケースや、日常の感覚が正確な知識

の吸収を阻害している例によく出合う。

以下、実際にあったケースをあげてみよう。

・旧某帝大医学部に合格した生徒の一言。

「入試にシリコンっていうのが出題されたけど、その性質って、ケイ素そっくりですね。ひとつ勉強になりました。」

(おいおい、元素記号 Si は何の略だ?)

・新入生に「酸アルカリの性質」を聞いてみた。

「酸は怖いけど、アルカリは身体にいいんでしょ。だって、酸性雨は良くないけど、アルカリ性食品は健康食品だもん。」

(おいおい、実験じゃ、アルカリの方がずっと怖いぞ!)

・同じく新入生に「イオンについて知っていること」を質問してみた。

「身体にいいのは陰イオン。悪いのは陽イオン。これ、マイナスイオンが出る携帯ストラップ、健康にいいんだよ。」

(中学理科から「イオン・水溶液」の単元がなくなった。したがって、彼らが初めて出会うイオンは「マイナスイオン」。しかも「イオン」は「エアコン」から吹き出すと思っている…)

・試験で鉛蓄電池の利用例を書かせた。

「自動車のエンジン、ケータイの電池。」

(エンジンは電池で動かんぞ。それに、君のケータイは、そんなに重いのかあ?)

化学の知識が、歪んだまま、生徒の中に沈殿していくのは、何としても防がねばならない。それには、化学の裾野を広げたり、知識・概念と物質・現象の橋渡しをしたりすることが必要だと思う。自分を育ててくれた化学への恩返しのため、ここ数年、様々な取り組みをしてきた。各種科学教室やテレビの科学番組へ出演したり、仲間と啓蒙書を上梓したり……。日本化学会の編集委員や年会の審査委員も、積極的に引き受けてきた。ある大学の理学部からの依頼で、大学の先生方を相手に「高校の理科教育の現状」を講演させて頂いたこともある。

今年から、某出版社の高校化学の教科書執筆陣に加えて頂いた。教科書の世界は制約が多く、自分なりの「化学観」を出せるかどうかかわからないが、恩師関根吉郎先生の教えどおり

「ひと暴れ」してみようと思う。

もちろん、日々の授業が一番大事であることはいままでもない。幸い、化学科も30年が経ち、教育に携わっているOB、OGの方も、増えてきたようだ。これからは皆さん方と連携していけたらと思う。中・高・大の先生方、是非、宜しくをお願いします。

最後になりましたが、多田先生が今年度で引退されるとのこと。先生は、創設当初より化学科を育ててこられ、大変なご苦勞をされたことと存じます。本当に、ありがとうございました。これからも、化学科を暖かく見守って下さい。

(山手学院中・高等学校教諭)

——再び振動スペクトルの世界に浸っています——

第5期 松尾 徹

——ふと気がつく——

もう47歳。(卒業してもうすぐ四半世紀。当時の伊藤紘一先生の歳をとっくに追い越してしまった。最近、近くが見えにくい。もう人生半分以上過ぎちゃった。今じゃ、しがない単身赴任。などなど) 中年男の憂愁の波が押し寄せるこの頃あります。

否。待て！ そう、「波」だ!! 最近の私を奮い立たせてくれるものは「波」です。過去を振り返りながら、最近の「波」の境地に至る過程を書かせてもらいます。

——学生時代(三つ子の魂の誕生)——

伊藤研を選んだのは、Molecular Spectroscopy (伊藤先生)、配位子化学(高橋先生)の授業を受けて、化合物の構造を波(スペクトル)で美しく説明できることに感動したことが原因のような気がする。研究室では伊藤先生の口癖、「むむ、これはすごい!」。実験結果が思い通りになかった時の先生のせりふで、「事実は理論を越える」という自然科学の真髄を教えられた。これらは1980年頃の話だけど、今も私のバックボーンである。

——会社での仕事(データマイニングとの出会い)——

ここでポーンと飛んで1996年。ニューラルネットワーク(NN)^(*)によりプラントの挙動をモデル化する仕事に取り組んだ。この仕事でわかったことは、次のようなこと。

- ① 詳細にデータを集めてNNで「多入力多出力+非線形性」で帰納すると現象の裏に潜む法則が見事に浮き彫りになる。(一般的にはデータマイニングとも呼ばれる)
- ② NNで求めたモデルで演繹的にプラントの操作条件を決めると、現実プラントの最適化が達成される。(お金に一元化した形で結果が出る。企業にとってはこれが一番大事。あるいは、社内報告にはその方向でまとめる。)

——最近の仕事(波への回帰)——

NNの仕事でデータマイニングの醍醐味を知り、プラントのデータをいろいろコンピュータでハンドリングするうちに、Wavelet変換^(**)のソフトウェアに出会った。

ソフトウェアとの出会いも、この時代に生きる者の幸せの一つかもしれない。プラントのトレンドデータをこのWavelet変換ソフトで処理すると、あら不思議?!。という具合に周波数のパターン(時間分解スペクトル)が現れる。かたはしからプラントデータをWavelet変換していくと、おもしろいように固有のスペクトルが現れる。従来、プラントの状態解析は時間領域におけるトレンドグラフで行っていたが、スペクトル(Wavelet変換:時間領域→時間周波数領域)でデータを眺めると新しい事実が見えてくる。

——まとめ(自画自賛)——

ここにきてようやく、大学の時に学んだことと現在の仕事結びついてきました。化合物と同じように、プラントのデータにも美しい構造が潜んでおり、Spectroscopicなアプローチで見出すことが出来るようです。Plant Signal Spectroscopy (PSSS; IEEEを真似て、PトリプルS。これは私の作った造語)という分野を切り開くパイオニアになれるのでは?。。と夢

だけは広がるこの頃なのです。やはりこれも、「三つ子の魂」というやつで、四半世紀前に教えていただいたこと (Spectroscopy) に無意識下でこだわりながらすごしているからかもしれません。というわけで、しがない四十男ではありますが、最近心の中にささやかながらも希望の小さな「波」を持ちながら生きております。

——蛇足的説明——

(*) ニューラルネットワーク (NN)

「全ての関数は、シグモイド関数の重ねで表現できる」という前提があり、関数の入出力をこのシグモイド関数の組み合わせで表す方法をニューラルネットワーク (NN) という。数学的な概念は古くから存在したが、1986年、Rumelhart によりこの関係の係数をコンピュータにより合理的に導き出すアルゴリズム (Back Propagation) が考案された。それ以降、NN を実用的に使用することが可能になった。

(**) Wavelet (小波=さざなみ)

フーリエ変換が対象の関数とサイン波の Convolution で周波数領域への変換を行うのに対して、ウェーブレット変換では、局在化した振動 (Wavelet: 時間的に局在した小さな振動=さざなみ) と対象関数との処理を行う。時間的に局在した振動との Convolution のために、時刻毎の時間分解スペクトルを求めることが可能になる。(三井化学勤務)

「学ぶ」ことについて

第9期 芹田 全功

私は現在、会社員であると同時に、某専門学校の1年生に在籍している。先日は中間試験がありいわゆる試験勉強に追われ、今も来週の実習レポートの作成中である。

私は1987年に伊藤紘一研で修士課程を修了し、その年に三菱化成工業 (株) (現在の三菱化学 (株)) へ入社した。最初の勤務地は、黒崎事業所 (北九州市八幡西区) で、その後、横

浜総合研究所 (横浜市青葉区)、本社 (東京都千代田区、現在本社は港区に移転) と転勤した。その間の職務は、研究職というよりもメーカーの技術スタッフとして、農業資材の一つである肥料に係わってきた。黒崎時代は工場生産される肥料の製造技術の開発や品質改善検討、横浜時代は新しい肥料の開発、そして本社時代は営業サイドと連携し顧客への技術サポートを行ってきた。学生時代はラマン分光を少しだけかじったのだが、社会人となってからは主として無機化学の世界で且つ農学分野との関連が強く、最初の頃はだいぶ戸惑いを感じていたが、工場-研究所-本社と様々な職場で企業人として多くの貴重な経験をする事が出来た。そして、会社の経営方針で肥料分野が関連会社化されることに伴い、2001年に私は自ら志願し同じ関連会社である (株) 三菱化学ピーシーエル (MBC) に出向した。MBC は臨床検査会社であり、病院等から依頼を受けた血液や尿などの検体検査及び製薬メーカーの医薬品開発を分析面からサポートする治験事業を主としている。職務は分析・測定が主体となることから、ある意味では学生時代に少し近くなったのかもしれないが、対象が工業製品からヒトの検体となり、さらに医療と直結している分野であるので、私としてはまったくの別世界に飛び込んだ形となった。

このような中、会社からの推薦で臨床検査技師としての国家資格を取得すべく、今年4月から臨床検査技師養成の専門学校に籍を置くこととなった。専門学校の同級生は、高校卒業後に入学した18~19歳が多く、他に4年制の大学を卒業してきた者、学校卒業後数年間社会人を経験した者などもあるが、私が最年長である。(ちなみに約65%が女子。)

社会人になると目前にある日常業務に追われ、授業・講義という形で先人たちの業績や知識をじっくり学ぶという機会は少なかったのが新鮮である。専門学校での授業は3年後の国家試験合格を目標としたカリキュラムであり、大学進学のための予備校に似ている。つまり資格取得のために必要な知識をひたすら「記憶 (暗記)」することが主体の勉強である。その範囲

は実に広く、解剖学、生理学といった基礎から専門の臨床化学、臨床免疫学や微生物学等、さらには精度管理の為に統計学、安全管理のための危険物取扱や高圧ガス取扱の初歩まで勉強しなければならない。私は徐々に学生に戻ったわけであるが、今更ながら「学ぶ」とはどういうことなのか考えさせられてしまった。学ぶことはまず「知る」ことから始まる。そして「知る」方法として授業・講義の形式も非常に大事であることを再認識した。独学で書物を紐解くことよりも、その道・分野に精通した方々から授業・講義という形で、目で（教科書や資料を読んで）、耳で（話を聞き）、さらに手を動かして（ノートやレポートに書いて）知識を吸収することが、いかに有意義でかつ効率的であることか。しかし単なる知識の詰め込みでは、なかなかそれが身につかない。なぜか。そこには感動がないからだと思ふ。たとえば今受けている専門学校の授業では一つの発見や法則の裏にある背景や思想を学ぶことは少ないのである。（広範囲の教科を限られた時間内で履修しなければならない事情があるので、致し方ないのではあるが。）このように考えてみると、大学での特に研究室配属後の研究を中心とした勉強というのは、自分で感動を探し、見つけていくことではないかと思う。そして学ぶ際には、学ぶ側に主体があることを忘れてはいけないことも再認識した。与えられた又は自ら得た情報をどのように処理するかを決定するのは、結局は自分自身なのである。自分としてはこのような基本的なことを大学時代に気づき、もっと学ぶべきであったと反省しきりである。

残りの学生生活2年半、いまや衰えてしまった自分の記憶力（正確には暗記力か）との闘いであるが、少しでも「学ぶ」楽しさをもう一度身に付けられたらと思っている。

（三菱化学ビーシーエル（MBC）勤務）

機能性量子材料科学への誘い

第15期 阿部 二郎

私は12年前の1991年3月に博士後期課程を修

了して工学博士の学位を頂きました。大学院時代には高橋博彰先生の研究室に所属して、時間分解共鳴ラマン分光法（懐かしいな〜）と分子軌道計算を用いて励起分子種の分子構造について研究を行っていました。幸い、大学院修了後に成蹊大学工学部に助手のポストを得ることができ、そこで1年間ピコ秒色素レーザーを使って分光の実験を続けることができました。翌年、東京工芸大学工学部に専任講師として着任して、そこで8年間過ごすことになりました。ここでの8年間は私の教育研究生活で非常に有意義なものとなりました。

まず講義を担当することになり、講義準備のために幅広い勉強をすることになりました。私に与えられた講義は学部3年生対象の「光物性」と4年生対象の「半導体化学」でしたが、量子化学という難解な内容を学部生に一から教えなくてはならない状況になり大変苦勞しました。その当時は、大学院を出たばかりの青二才ですから、他人に教えることができるほど量子力学を理解しているという状況からは程遠く、教科書を読み返すたびに、「ああ〜、そういうことだったんだ!」と、量子力学の理論体系に関心したものでした。当時の講義ノート（その時の学生のノートをコピーさせてもらったもの）を読み返すと、まだまだ不十分な構成だと恥ずかしくなります。この時には幅広い内容を理解することを学生に要求していましたが、その後、徐々に内容を絞っていくことになりました。また「半導体化学」の講義では、トランジスタの作動原理、p-n接合、FET素子などのエレクトロニクス技術から、導電性高分子や有機半導体、分子性導体などの分子エレクトロニクス材料の勉強をせざるを得ない状況になりました。それまでは学部時代から大学院修了まで、いわゆるコテコテの基礎分野である分子分光学の世界に身を委ねていた者としては、「材料科学」は初めて接する異分野で、生き生きとした、とても輝いたものに見えました。振り返ってみると、この講義を担当したことが、私を「機能性分子材料の科学」へ誘うきっかけとなりました。（工芸大学に感謝、感謝!）そして当時、相模中央化学研究所で研究を行っていた

一年後輩（高宮研OB）の根本修克君（現・日本大学工学部助教授）に誘われて高分子学会に参加して、ますます材料科学の面白さを肌を感じるようになりました。そして日本写真学会、日本液晶学会と材料関係の学会に参加する機会が増えてきました。

一方、研究に関しては有機非線形光学材料、フォトクロミック材料へと展開してきました。なにしろ材料に関しては全くの素人でしたから、大量の論文と実験書を読み漁って、ゼロから研究を立ち上げることになりましたが、今思えば、この時が一番充実していて楽しい時期だったかと思います。大学での雑用があまり回ってこない30歳前半から37歳くらいまでの期間は、自ら実験を行う時間が持てるという意味では重要な時間だったと思います。有機非線形光学材料に関する研究では根本君、化学科1期生の長瀬裕先輩（当時、相模中央化学研究所で根本君の上司、現・東海大学工学部教授）との共同研究で短い期間に20報以上の論文を出しました。これは自分にとって、とても大きな財産となりました。後輩の河野正規君（松本研OB、現・東京大学大学院工学研究科講師）との共同研究で、光解離型フォトクロミック分子であるヘキサアリーールビスイミダゾールの単結晶中に生成した光誘起ラジカル対の構造を世界に先駆けて明らかにしたのもこの時期でした。2000年4月に東京都立大学に異動してからは、分子磁性材料の分野にも触手を伸ばして、今日まで光とスピンの絡んだ研究を続けています。またこの時にFET素子についても手をつけましたが、それが今展開している電荷移動型2成分液晶系の電子光学特性の研究につながっています。

（フタロシアニン系のようなディスコティック液晶ではなく、スメクティック液晶の分子間電荷移動吸収帯を光励起することによってキャリアを発生してトラップすることができ、短絡電流を測定することでトラップされた電荷を読み取ることができる！）

2003年4月からは青山学院大学理工学部化学科（やっと、化学科に戻ってきました！）に着任して研究室を構えることになりました。ここでも「量子化学Ⅰ」と「量子化学Ⅱ」、さら

に、大学院科目として「量子化学特論」を担当していますが、最近になってやっとまともな量子化学の講義ができるようになってきたかな？と思っています。また研究においてもようやく量子化学を操れるようになってきたと感じています。研究室でも実験結果を解釈するのに大学院生が波動関数を使って議論しているのを見ると、思わず心の中で「おお～！すごいじゃん～！」と叫びたくなります。学部時代には応用化学科の宮崎智雄先生の研究室で量子化学を勉強していましたが、自分には難解すぎて向かないかな、と思っていました。高橋先生の研究室でも道具として分子軌道計算を使っていましたが、回りの量子化学研究室の先輩方を見てると難しい理論や式を自在に操っている姿を見て、ますます自分はこの世界では勝負できないな～と感じていました。量子化学、分子分光学の王道を歩んでいる方から見ると、私のような立場は半端者と映るでしょうが、機能性材料の分子設計を行う上で量子論的な考えに基づいて分子を眺めることができるような学生を一人でも多く輩出したいと願っています。また若い諸君には自分の能力を十分見極める力を付けて、自分の能力が最大限に発揮できる分野を開拓してってもらいたいと強く望みます。さらに、専門分野に固執しないで、積極的に新しいサイエンスを絶えず吸収していく姿勢を持ち続けることを期待します。

最後に、私を教育研究の世界にお導き頂きました故・宮崎智雄先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

（青山学院大学理工学部化学科助教授）

近況報告

第16期 松尾 亜弓（旧姓 沖野）

私は、1992年、第16期生として化学科に入学し、4年間の在学期間を経て、その後、技術職員として早稲田大学に就職しました。一昨年、恩師、高宮先生から「化学科創立30周年記念行事の実行委員会を発足するので事務的な業務をやってほしい」とのお話があり、記念誌の編集

や式典の準備などのお手伝いをさせていただき
ました。委員会では、高宮先生、高橋先生、多
田先生の絶妙なやりとりの中で、創設時のご苦
労話などを聞くことができ、また、お名前しか
存じなかった大先輩の方々とお話できる機会も
あり、大変貴重な経験をさせていただきました。
恐らく40周年を迎える頃には、創設時より
いらした先生方は退官されていることと思いま
すので、その意味でも今回の30周年は化学科に
とって大きな意義がありました。化学科OBとし
て、学科設立の趣意を引継ぎつつ新たに発展
していく化学科を陰ながら支えていきたいと思
います。残念なことに記念式典の日が私の第2
子出産予定日と重なり、直前になって関係者の
の方々には大変ご迷惑をおかけいたしました。こ
の場を借りてお詫び申し上げます。

さて、近況報告とのことですが、現在は育児
休暇中で大学との接点はありません。子育ても
2人目ともなると楽に、と言いたい所ですが、
先月(11月)、大変な1ヶ月間を過ごしまし
た。生後6ヶ月に満たない娘が、敗血症から細
菌性髄膜炎を合併したのです。命は助かって
も後遺症が遺る可能性のある重篤な病気です。
「髄液が白濁している」「輸血が必要になるか
も知れない」次々に宣告される先生の言葉に胸
が潰れそうになりました。パニックで麻痺した
感覚が感じとる、あのどうにも言いようのない
つらい感覚は、もう二度と味わいたくありませ
ん。幸運にも娘は後遺症もなく、私達のもとに
笑顔で戻ってきてくれました。と、同時に、私
のなかで、ある変化が起きました。これまでの
在職12年間は、化学分析関連の研究・教育支
援を行う傍ら、環境計量士、臭気判定士、公害
防止管理者等の国家資格取得の機会を与えて
いただき、また、少額ですが職員にも申請でき
る科研費枠があり、酸素センサーを開発してま
もなく商品化される予定です。稲化会報に寄稿
されているOBの方々の業績には当然足元にも
及びませんが、これまで自分なりに成果を出し
つつ楽しみながら仕事をしてきました。4年前に
長男が生まれてからは、職場にも家族にも負
荷をかけていることは承知でしたが、子育てを
理由に仕事をやめるという選択肢はあり得ませ
ん

でした。しかし、娘の大病をきっかけに、仕事
を続けることに対して自信がなくなりました。
「子供にも職場にも多大な負担をかけ、しかも
自分にしかできない仕事ならともかく、誰に
でも、いや、私などより余程効率よく仕事をする
人がいくらでもいるのだ。」との思いに駆られ
るようになりました。

定員の増加に伴って、化学科の女子学生の数
も増えましたが、そもそも化学科、果ては理工
学部的女子学生に求められている行き方とは何
でしょうか。女性でも当然のように大学院に進
学する時代。性差なく、産官学界での活躍を女
性も求められています。その一方で、どんなに
法律や企業の福利厚生が充実してきたといっ
ても、子供は母親が育てるのが一番、という動
かせない事実が存在するのです。女性が幾多の
困難を乗り越えて仕事を続けていくためには、
「私は、この仕事がしたいのだ」という強い信
念が必要です。そう思わせる仕事との出会
い——それは、いかに大学が、先生が、OB
が、学生達をそれぞれに相応しい道へと導く
かにかかっています。化学科も創立30周年を迎
えたのですからOB組織もより一層強力なもの
にし、後に続く現役学生を支えていきたいと思
います。

娘が以前のように元気になるにつれ、「この
まま仕事をやめたくない」という思いが日に日
に強くなってきました。子育ても仕事も完璧に
こなすことは難しいですが、子育ての制限があ
っても必要とされる人間になるため、日々努
力を惜みず、頑張っていきたいと思えます。

(早稲田大学理工学部ケミカル部門化学分析実
験室勤務)

「霧深き千葉の夜」

第24期 伊藤 邦孝

今夜は会社の忘年会でした。修士過程を出
て、入社から早2年、こんな自分にも稲化会便
りの記事を書く機会が巡ってまいりました。

私の住んでいるあたりは、東京湾に程近い丘
陵という地形のせいか、冬場にはしばしば濃い

霧が夜を覆い尽くします。その一事で、見慣れた住宅地も、まっすぐに伸びた鴨川道路さえも、ミステリアスな風景に変貌するのだから不思議なものです。今も窓の外は、ロンドンもかくやという白い霧に覆われています。

さて、私が勤めておりますのは「東レ・ダウコーニング・シリコーン」という会社です。その名の通り、シリコーン諸製品のメーカーで、化学系の方に会社を紹介する時、「実験室にあるシリコーングリース」を例にあげると、大体の方が「ああ！」と、この会社を思い出して下さるでしょう。

しかし、その実、我が社のシリコーン製品は実験室に止まらず、あなたの身の回りにある様々な製品……紙、自動車、ビル、衣類、パソコン、携帯電話、洗剤、シャンプー、化粧品……といったあらゆる生活の箇所に入り込み、すっかりそこに溶け込んでいるのです。某た○ぱんだのように、「気が付くと、そばにいる」といったところでしょうか。そんな不思議な存在感が、シリコーンの何よりの魅力かもしれません。

私自身はシリコーン・エマルションの研究開発に携わっています。本来、水に溶けないシリコーンガムやシリコーンオイルを、機械力や界面活性剤を用いて乳化することで安定なエマルション製品を作るのが主な仕事です。これらのシリコーン・エマルションは、繊維処理や金型からの離型剤などの工業用途向けと、シャンプーやコンディショナーなどに配合される化粧品用途向けに大別され、いずれも日常生活に欠く事の出来ない素材の一つとして皆様のお役に立っています。

入社当時は「エマルション」というもの自体に不馴れで、右も左も分からない中での仕事はじめてでしたが、先輩方の御指導の下、何とか仕事を進めてきました。特に、「乳化」は在学中に勉強して来た分野とは全く違う経験／技術を要求される手法でありながら、応用分野も広く、その奥の深さや有用性には驚かされるばかり。

入社二年目で、まだまだ独創的な新製品の開発には至っていませんが、「今にみている！」

の心意気で、研究開発と勉強に取り組む毎日です。

そんな今の自分を支えているのが、化学科での日々、そして松本研で過ごした研究生活です。

一貫性もないまま、表面的な知識を求めるように過ごしてしまったのでは……と反省することも多い学生生活でしたが、そんな自分が学びえた最大のもは結局、「化学の基礎」でした。研究生活でも、松本先生はしばしば、「化学のイロハ」とおっしゃって（それはしばしばお叱りだったのですが）、学部レベルの基礎的素養の大切さを説いておられました。化学の基礎を多少なりとも身につけていたことが、今、まったくの異分野に身を置く自分の柱として、最大の強みになっていると思います。

化学の面白さは、同時に、日常のささいな出来事も、大きな事件もナノテクも、全てを「化学」の目で捉え、その展望を切り拓いてゆける強さ。今後も、化学の基礎を忘れる事なく、大地に根を張った巨木のように、しっかりと物事の本質を捉えて勉強を続け、これからの人生の花を咲かせてゆこうと思っています。

さて、窓の外、ようやく霧も晴れました。見上げる夜空で、冬のオリオン座が煌々と輝いています。

(東レ・ダウコーニング・シリコーン勤務)

海外便り

ロンドンビジネススクールでの生活

第9期 大矢 淳子

みなさまお元気でご活躍のこととお慶び申し上げます。私は、現在、ロンドンにて18年ぶりの学生生活を送っています。勉強嫌いで有名だった(?)私が、どうしたわけか、2003年9月からロンドンビジネススクールのスローンマスターズというコースで学んでいます。

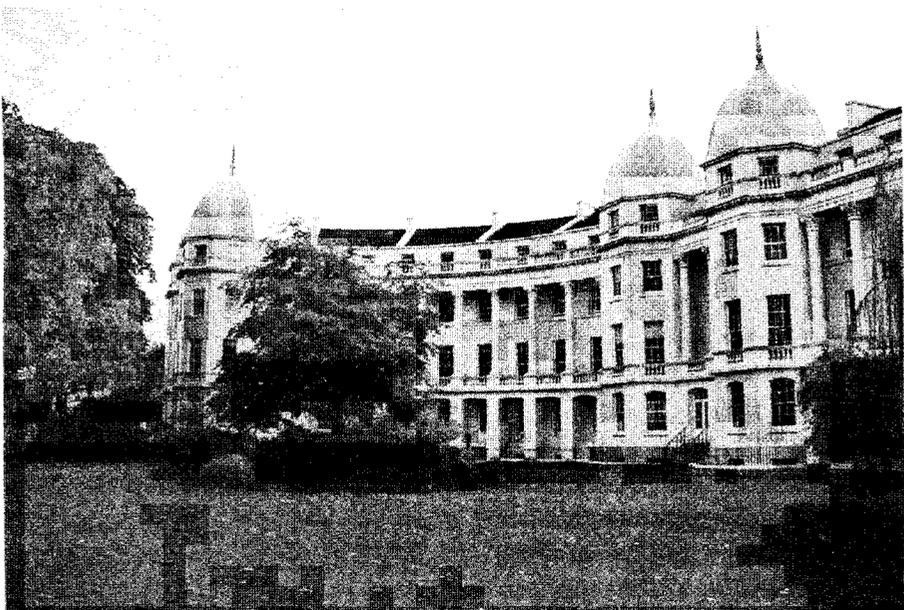
このプログラムは、Master of Science in Management を授与するコースで、当校、MIT、スタンフォードの3校でのみ開設されています。10年以上のビジネス経験者を対象とするユニークなプログラムです。私のクラスは、23カ国から来た65人からなり、平均年齢は38歳。世界各国から来た、幅広い分野の様々な職種のクラスメートとともに、会計やファイナンス、ストラテジー、経営経済学などを学んでいます。

1学期は、ほぼ毎日2コマの授業がありました。午前の授業は9時15分から12時30分、午後は2時15分から17時30分。事前に配布されるコースバインダーの指示に基づき予習をしなければならないのですが、読む速度が遅い私はなかなか完璧には予習ができませんでした。授業は講義が中心ですが、経験豊かな生徒たちの厳しい要求に応えるために、各教授とも講義の仕方や使用する教材に様々な工夫を凝らしています。いわゆるケーススタディも多く用いられていますが（「ホンダ」の事例も取り上げられました）、例えば、人材・組織管理の授業では、映画「12人の怒れる男」を事前に見て、そこで使われている交渉のテクニックを議論したりしました。



授業風景

1学期を終え、「多様性」がいかに重要であったかを痛感しました。まず、クラスメートから学べる点です。例えば、ケースで取り上げた企業に勤めていた人が内部からの視点で実態を説明してくれたり、元パイロットが航空業界について、元軍人が軍隊の人材管理について語ってくれたりします。学校が多様性を強調するのは、このような理由からだと思います。当初は、彼らの発言がよくわからず、色々な国のなまりのある英語が理解できないためだと途方にくれたのですが、よくよく聞いてみると、必ずしも全てがテーマに沿った発言をしている訳



学校の外観（19C初頭）

ではないことがわかり、少々安心したりもしました。しかし、自分の知識や経験をクラスと共有化しようという意欲は評価できるし、私ももっと貢献しなければならぬと思っています。

グループワークも多様性を学ぶ良い機会でした。私のコースでは、リーダーシップを養うため、5～6人のグループで様々な課題に取り組むことが要求されます。私のグループは、イギリス人2人とパキスタン人、中国人と私の5人でした。「健全」と診断されたグループだったのですが、それでも、作業の進め方などで、パキスタン人と中国人の衝突が数回あり、カルチャーショックを受けました。12グループ中の3つくらいは崩壊の危機にあったという話です。やはりカルチャーギャップが原因となっていたようです。日本人だけの環境で仕事をしていた私にとっては、刺激的でしたが良い経験になりました。

更に、多様性は、様々な交流や遊びを通じて、文化に対する知識を深めてくれました。ラマダンが近づくと、トルコ系の学生がメールで情報を流してくれたり、花火を行う「ガイフォークスデー」という日の由来をイギリス人が教えてくれたりします。また、クラスには「social rep」といわれる委員がいて、様々なイベントを企画してくれます。学校の裏にあるリージェンツ・パークでのピクニック、スクールディスコ（学生の制服のような格好をして行くディスコ）、花火鑑賞などのイベントに加え、金曜日の夜には必ずといっていいほど誰かの家でパーティが開かれます。パーティといっても、飲み物を持参し、延々立ち話をするというのですが、リラックスした雰囲気の中で話すことは、クラスメートの人となりや背景となる文化を知るにはとても良い機会です。私のイベント出席率の高さは、クラスメートが認めるところとなっています。

87歳のミケランジェロは「I am still learning.」と言ったと伝えられています。この年齢には遠く及びませんが、彼の精神を見習って、現在の環境の中で貪欲に学びたいと思っております。

2004年が皆様にとって幸多い年となりますよ

うロンドンよりお祈り申し上げます。

(資生堂勤務)

研究室便り

石原研究室

我らが石原浩二研究室は無機化学の研究室で、教授1人、ポスドク1人、修士2年2人、修士1年3人、学部4年7人、たま3匹（2003年12月現在）からなる賑やかな研究室である。我々は、速度論を駆使し、様々なボロン酸、白金錯体の反応の機構を明らかにすることを目的に日々研究に勤しんでいる。では、速度論とは何か？その答えは石原研にある！

最近一番のNewsといえは、研究室が広くなったことであろう。おかげで実験スペースも広くなり、実験環境がますます向上し、更なる成果が期待できる可能性があるといえなくもない気がする。

最近二番目のNewsといえは、数年ぶりに女性(?)が入ってきたことである。しかも2名もである！これにより、研究室に新しい風が吹き、みんなのやる気が向上すると思いきや、向上したのは摂取カロリーだけである。

実は一番のNewsというのは、石原研史上初のポスドクがやってきたことである。顔は童顔、しかしヘビースモーカーで、そのギャップにはさすがの浩二氏もお手上げである。彼のおかげで、石原研全体の偏差値が3上がったことは間違いない！

我らが教授こと、石原浩二先生は確かに口数は多くない。そのくせ、口にする事といえは「ふう～、…やれやれ」である。Aさんがしつこく先生のプライベートについて質問しているが、先生はいつも頑なに口を閉ざしている。そのため、とにかく謎が多い人物である。速度論をほぼマスターしているM2の先輩方でも先生について知っていることは少ない。さあ君も浩二ワールドに来てみないかい？

おふざけはこのへんにして、ここから真剣に書こうと思う。……が、紙面も時間もないため、今回は見送ることにする。

伊藤研究室

我々伊藤研は、伊藤絃一先生の御指導のもと修士7名、学部7名、研究員2名の計17名という、過去最大の規模で日々研究と勉学に励んでいます。今年の研究室の構成は、研究テーマを4つに大きく分けて、IR系（赤外分光法）・SFG系（和周波発生分光法）・UHV系（超高真空下での赤外分光法）・ラマン系（ラマン分光法）として活動をしています。系ごとに用いる装置や手法、また対象とする系・試料は違いますが、全体としては、表面・界面での有機分子の特異的な挙動を、振動分光学の視点から解明する、という事に帰着します。

研究以外の紹介をしますと、伊藤研の1年間には新4年生歓迎会である春のビアパーティー（伊藤先生宅）からスタートします。ここでは先生の隠れた音楽の才能？（リコーダー）と奥さんの料理の腕に驚かされます。そこからしばらくは暗い地下室（伊藤研は62号館B2Fにあります）の雰囲気を楽しみながら実験を行い、携帯の電波が入らないことや太陽を見ない生活に慣れて……いく努力を一通りしていきます。夏、冷房が効いた涼しい部屋で前期のデータゼミの準備に追われます。このデータゼミが終われば、二週間程度の夏休みに入ります。秋、伊藤研が最も重視している分子構造討論会に参加します。この学会は毎年伊藤研からも、数人が発表しており、一つの区切りとなっています。冬、後期のデータゼミ（クリスマスなのに……）を乗り越え、卒修論に向けて研究室が一番忙しい時期に入ります。実験やデータ処理にと、24時間研究室に閉じこもることも珍しくありません。その後、3月に春の年會に参加したらもう次の年度になり、こうして伊藤研の一年間は過ぎていきます。

今後は、生体関連物質についての研究にも着手すべく、リン脂質の水表面単分子膜の構造解析をIR系とSFG系が協同で実験を始めていま

す。UHV系は計算化学を用いての理論的なアプローチも行っています。ラマン系では表面イメージング（原子間力顕微鏡など）を組み合わせた研究を行っています。それぞれの系で日々新たな挑戦を行い、将来、研究者として社会に貢献できるような技術・知識を身につけるため、みんな頑張っています。

柴田研究室

柴田研究室では、『遷移金属錯体を触媒として、有機合成反応の基幹となる新しい炭素-炭素結合生成反応の開発および触媒的不斉反応への展開』を目指して、先生の熱い(?)指導の下、朝十時から夜遅くまで研究に取り組んでいます。

しかし、本研究室は、昨年四月から始まった研究室ですので、今では日々当たり前のように実験を行っていますが、配属された四月には実験台もない状態でした。そのような、椅子と机だけが置かれていた普通の教室に、実験台・ドラフト・流しが設置され、その後、続々と到着する実験器具の組み立てが始まりました。私たちは、エバポレータの組み立てからパソコンの立ち上げまで、研究室にある、ありとあらゆるものを、説明書を頼りに組み立てていきました。また、「少しでも安い会社で注文しなさい!」という先生の厳しいお言葉に従い、必要な試薬があれば、分厚いカタログを何冊も机に並べ、厳選した上で注文しました。こうして、『普通の教室』が『研究室』へと変貌を遂げ、私たちは自分の所属する研究室を自らの手で立ち上げるという貴重な経験ができました。研究室の立ち上げから実験の手法まで全てのことを、配属直後で右も左も分からない私たち四年生四人に指導してくださった柴田先生の根気強さには、頭が上がりません。

初めてお会いした時の先生は、口数少なく、その上無表情であったため、皆、接し方に戸惑ったことを良く覚えています。初顔合わせ直後から始まったゼミでも、そのような雰囲気は変わらず、何を考えていらっしやるか分からない先生の反応に怯える毎日でした。しかし、

一ヶ月経った頃から、先生の顔にも笑顔が見られるようになり、それまで抱いていた恐怖心(?)に似た感情は、徐々に払拭されることになりました。最近では、昼食を五人で食べに行くこともあるほど、先生を含め研究室全体が和気あいあいとしています。今年、新たなメンバーを迎え、実験台もない状態からスタートした研究室は、着々と成長を続けています。

高橋研究室

現在、高橋研究室は65号館5階の奥のほう(最近柴田研究室が出来たため一番奥の地位は譲ってしまった)で高橋先生をはじめとして、M2 2名、B4 6名で毎日を過ごしている。ここでM1がないのはミスプリではなく、実際に1名もないという寂しい状況。おかげで修論間際の忙しい時期に雑用が溜まりに溜まっている始末で、バイトでも雇いたいと思う今日この頃(涙)

まあ愚痴はこれくらいにして研究内容について。ずっと続いていることだが、色々な分子の光化学反応を時間分解ラマン分光法および時間分解吸収分光法をつかって観測している。

昨年から本格的に稼動し始めた固体レーザーも順調で、特に「ラマン測定」に力を入れている。

「ラマン」について少し説明しておく、ある物質に単一振動数のレーザー光を照射すると、入射方向とは異なった方向に若干違う振動数を持つ光が散乱される。その散乱のことを「ラマン散乱」といい、この散乱光を観測し、スペクトルにしたものを「ラマンスペクトル」という。「ラマンスペクトル」は、例えば分子内で結合が一つ違うだけで、全く異なったスペクトルを得ることになる。よって時間的なスペクトルの変化から、その物質の反応経路などを知るのに非常に有用なのである。

レーザーが安定していることなどから昔よりは随分測定しやすくなったとはいえ、「ラマン散乱」は非常に弱い散乱であるため、長時間に渡って測定を行ったとしても、望んでいた結果が得られないことが多い。しかしスペクトルを

得る瞬間を夢見てこれからも実験をしていこうと思う。

多田研究室

多田研究室、最期の卒業生Tです。『最期の卒業生』というのも今年で多田先生が退職されるからです。

早いものでここに配属され十ヶ月、その時間を過ごしてきた自分から見た多田研を紹介しようと思います。

多田研は基本的に10時から…ですが実験の都合上、朝九時に来る人もいれば昼頃来て徹夜する人もいます。すべて自己責任で行われています。

メンバーについて、まずは多田先生。僕から見て多田先生というのは、化学の先生というだけではなく、花見の際も桜についていろいろ教えてくれたり、また毎朝十時前に来る学生がいますが、先生も少し早く来て、その学生を確認して「またあいつに負けたかあ(笑)」とも言ったりする子供っぽいこともあり、なんというか、人間味のある先生です。

次に秋葉先生。秋葉先生は超原子価化合物を専門にされている先生で、一言で『元気!』それに尽きます。朝、研究室に入ってくる姿は学生よりエネルギー感。「どう?研究進んでる?!」と笑顔で学生と話しています。以前秋葉先生の名前で検索した掲示の中には『ナイスミドル』といったコメントがありましたが、まさにそんな感じです。

続いて多田研究室の研究メンバーについて。

M2 「あたしたち、しないですぐ寝ちゃうから」片山さん(笑)。

一体何個携帯持ってるのかわからない…佐々木さん

無類の酒好きで「イグ?」と誘ってくる松原さん。

本人はバテてないと思ってるけど動画見過ぎの森モアラ

M1 ほんとお口だけの木村洋平、節操なさすぎ!

自らセクハラ発言をふってにおいて「セク

ハラ反対」と叫ぶ霜鳥さん。

昔は似合わないカチューシャ・ロン毛、
あまりにも痛すぎる瀬名さん。

B 4 クリスマスはボンボンして、「やばい
ね、ボンボン良すぎ」とほざく荻野
(式)。

多田研きってのバカ。こいつも酒が好
きで誘ってくる河野。

自他共に認めるキャピラリー●☆こ、
木下大輔。

頭ん中馬しかいない渋谷。最近松原さ
んに多大な影響をおよぼしてる…

はじめの頃は毎回来るとお菓子を持っ
てきてくれた福島さん。最近ねーなあ。

異常です。まともなのは先生しかいない。バ
グってます。そんな多田研に栄光あれ。

中井研究室

中井研究室は理論化学（電子状態理論）の研
究室です。理論化学はシュレディンガー方程式
に始まる理論計算によって物理、化学現象を探
究する学問です。当研究室の主な研究として
Born-Oppenheimer 近似を使わない理論計算で
ある NOMO 法や計算方法の効率化 (liner scal-
ing) を目指した新しい計算アルゴリズムの開
発、Energy Density Analysis (EDA) による分
子の局所部分のエネルギー解析、分子動力学に
基づく計算、固体表面現象の解明などを行って
います。研究対象は、有機、無機、構造化学と
幅が広く、研究テーマの選択に関しては自由度
が高いと言えるでしょう。

研究室のメンバーは現在、中井先生のほか、
博士研究員1名、博士後期課程4名、修士課程6
名、学部生7名と大勢でにぎやかです。学年の
層は幅広いですが皆仲の良いのが自慢です。

普段の研究室の日常は、コンピューターと向
き合いながらの研究が主となり、メンバーそれ
ぞれが個別のテーマを扱っているわけですが、
ときに研究室のメンバー同士でお茶などを飲み
ながらディスカッションをしたり談笑をしたり
とメンバー同士の交流も盛んで、決して孤独な
研究生活というわけではありません。また、コ

ンピューターさえあれば研究ができるので深夜
でも研究室では、徹夜で研究やささまざまな作
業をする人がいたり「不夜城」になることもし
ばしばです。そして、週に一回ゼミを開き、
各々の研究成果を発表し合い、お互いの研究の
進行状況を確認しあったり、意見を交換したり
しますが、このとき議論が白熱して長時間に及
ぶこともあります。ほか、研究外の活動とし
て、先生を含めみんなで昼食を食べに行ったり
、不定期に飲み会を開いたり、年末には先生
の家で忘年会をしたりします。研究で部屋にこ
もりがちになっ てしまうので、今後はスポー
ツなど皆で楽しめる屋外での企画も増やしてい
こうと考えています。

純粋に理論化学に興味がある人、中井研の雰
囲気を味わってみたいという方は気軽に研究室
のドアをたたいてみてください。

中田研究室

中田研究室では、生物活性天然物と呼ばれる
複雑な化合物の合成を中心に研究を行っていま
す。生物活性天然物は、自然界においてカビや
植物などにより生産されており、「医薬品」に
なるような優れた生物活性をもっている有機化
合物もあります。現在、主として Taxol,
FR182877, Erinacine E, Phomopsidin などの合
成研究を行っていますが、これらの化合物は
「世界で初」の全合成を目指すものもあれば、
まったく新しいルートで効率的に合成を試みる
ものもあります。それらは単に複雑な構造を
もっているだけでなく、多くの不斉中心が存在
しているため、その不斉合成が問題となってき
ます。そこで、中田研では全合成だけでなく、
新規不斉触媒反応、オリジナルな不斉配位子を
用いた不斉触媒反応にも力を入れています。現
在、主として金属触媒を用いた不斉分子内シク
ロプロバン化反応、オリジナルな不斉配位子の
設計と合成に基づく不斉触媒反応の研究などを
行っています。

最後に、毎日朝から晩まで実験漬けのメン
バーを紹介。

研究もプライベートも充実している先生を筆

頭に、

D2：似非九州男児兼2Fのボス 岩○、夏でも
ホットコーヒー 鈴○、神(紙) 高○

M2：アルデヒド大好き 井○、エアマスター
澤D、祭りだ祭りだ論吉祭り T田、イン
トロ王 本○、小栗? ○宅

M1：「宮野、バナナ食うか?」 ○津○、イ
ベント飲み会大好き 海○、桂馬で王手
河○、実験<<<バイク 松○、年越し
実験? ○辺

B4：4年で全合成達成?! 白○、ブラッ
ディローズ 木○白、芳香剤 里○、
かりん塔 孝○、紅一点 ◇津◇、鱈
野○、「うほ、食べます」 宮○

以上、先生と20名の学生で頑張っています。

新田研究室

新田研究室では、主に芳香族化合物を対象として研究を進めています。新しい芳香族化合物、複素芳香族化合物の新規合成法の開発、静的、動的な構造と電子的及び化学的性質の解明と新しい機能の発現などに着目し研究を展開しています。

新田先生を中心に研究を行うメンバーの紹介。ポスドクのSNさんはキレのあるダジャレでよく時を止めています、しかし真の姿は頼れるプロの研究者です。バイクとパンショップの頭脳パンをこよなく愛する助手のYMさんは、とつても恥ずかしがり屋ですが、新田研一の切れ者です。B4の頃、会長だったTTさん(M2)も、今年は何と社長に降格! 憎き政敵は加水分解・脱炭酸? M1のTUさんは、新田研唯一の元ポリマー研究員。3人の社長に囲まれつつも、まじめに実験するヒゲが濃い好青年です。M1にして研究室のエースであり社長でもあるHOさんは、実験中常に歌っています。とても楽しそうです。M1のYY君は真面目な感じとは裏腹に、新田研誇る雀士です。和がったときに発せられる「御無礼」という言葉に毎回驚かされます。馬を愛するM1のKYさんは日曜日が本業ですが、副業の実験でもお泊まり連発する底なし体力の持ち主です。B4のKI

君、頭の良さとひきかえに「健康」を失ってしまいました。趣味はフルートとSI君の育成。有機化学が苦手なB4 SI君の実験報告は自爆テロそのもので、その姿はさながら水に投げ込まれたナトリウムのようにです。ドラクエIIIを知らない非国民、B4のDO君は某先生のお気に入り。自転車通学なのに今日も泊まって実験中。B4のJNはいつもモノマネばかりやっています。田中くにくにか…他にもありますがそれ研究室にてお見せできます。スロットがお仕事のB4 MMは、毎回実験するたびにプチギレています。最近ではさらにその上を目指すとか言って人類の限界に挑んでいます。乾燥肌のB4 TM君は仮眠の時、目が半開きになっています。全身乾きがちな彼ですが、実はドライではない熱い男です。手癖が悪く、すぐいたづらをする、新田先生称ずる“平成のエジソン”ことB4のMW君もいます。このように新田研究室は強烈な個性の持ち主がそろっており、毎日楽しく研究に励んでいます。

古川研究室

古川研究室も研究室が発足してから6年目を迎え、現在、ポスドクが1名、D2が1名、M2とM1が2名ずつ、B4が7名在籍しており、古川先生の下で計13名のメンバーが日夜研究を行っています。

古川研は、紫外領域から赤外領域までの吸収スペクトルや、ラマンスペクトルといった、分光学的な手法を用いて物質の様々な性質を研究している研究室です。古川研が興味を持っている化合物は、ポリパラフェニレンビニレン誘導体やポリチオフェン誘導体等に代表される導電性共役高分子や、有機EL素子によく用いられるTPDやAlq3、銅フタロシアニンなどの低分子化合物です。これらの化合物を用いて、有機発光ダイオード(有機EL素子)や、有機電界効果トランジスタ(OFET)などの有機電子デバイスを自分で作製して、その動作機構や劣化機構を赤外吸収スペクトルやラマンスペクトルを測定することで解析する人もいれば、測定したスペクトルを、用いた化合物やモデル化合物

の基準振動解析結果を用いて帰属し、化合物の構造や配向について解析する人もおり、基礎から応用、理論計算から実験まで、メンバーそれぞれが、色々な実験法を駆使しながら、さまざまな観点で研究を行っています。

古川研では、良い意味で学年による上下関係というものが希薄で、メンバー全員が和気藹々と日頃の研究生生活を送っています。上級生が下級生の実験結果について、一緒にディスカッションをするのは当然ですが、上級生が下級生に自分の実験結果を見せて意見を求めたり、議論がはじまったりするのは、よく見かける風景です。研究室を離れても、学年に関係なく気のあった人とお酒を飲みに行き、プライベートなことからそれぞれの研究結果まで、様々な事を酒の肴にして、日頃の疲れを癒し親睦を図っています。また、メンバーが実家に帰ったり、旅行に行ったり、学会に行ったりして研究室に戻ってくると、お土産として、その土地名産のお菓子を買ってくるのがいつの間にか慣例化し、お盆明けや年始など、数日間はおやつに困らないほどの食べ物が出積みになります。

このように、古川研では、「何事にも一生懸命」の精神でメンバー一同研究に励んでいます。

松本研究室

松本研究室は無機錯体化学の研究室です。3つのグループに分かれて幅広い研究を行っています。

- 1) 白金グループの5人(ポスドク2人・博士課程・修士課程・学部生各1人)は、白金錯体を用いたアルキル・オレフィン触媒反応や新規白金多核錯体の合成を行っています。最近 Pt(III)-Ti(II) の強い金属結合が存在する大変興味深い一次元鎖状化合物の合成に成功しました。現在は Pt-Pt 結合を有する鎖状化合物の合成と新規物性(電導性・磁性等)の実現を目指しています。
- 2) ルテニウムグループはジスルフィド架橋ルテニウム二核錯体を用い、ケトン・アルケン・アルキン類との反応について研究しています。これらの反応は硫黄配位子上で起

り、C-H 活性化を伴って C-S 結合を持つ錯体を与えることが分かりました。修士課程1人・学部生1人の2人で実験していましたが、この1月に以前松本研に所属していたポスドクの方がさらに実力をつけてカナダから帰国しました。これを機に、さらに発展した新しい研究が始まりそうです。

- 3) ユロピウムグループはポスドク4人に学生9人の大所帯で、合成とアッセイのグループに分かれて研究をしています。研究目的は希土類蛍光錯体を合成し、これをバイオテクノロジー分野の蛍光検出法として応用することです。現在、合成グループでは新規錯体の合成に、アッセイグループでは DNA チップへの応用および、遅延蛍光顕微鏡の開発に全力を注いでおります。研究室全体としては、グループごとに月2回の結果報告、石原研と合同で週に一回論文ゼミと輪読を行っています。実験環境・設備とも整い、とても恵まれた状況で実験をしています。また、大型プロジェクトが成果を上げつつあり、さらなる成果を目指し意欲的に研究を進めています。

稲化会からの報告とお願い

【1】 稲化会会則の改定と新しい細則の決定
平成15年5月10日に開催されました稲化会総会で、稲化会会則改定案と新しい細則案が可決・決定されました。改訂会則と新細則は住所録採録 CD-ROM の末尾に掲載しました。

【2】 会計報告

2001年度

〈収入の部〉

前年度繰越金(郵便局)	¥1,676,668
(あさひ銀行(普通))	¥ 154,509
利息	37
会費(¥3,000*52名)	¥ 156,000
(¥30,000*2名)	¥ 60,000
合 計	¥2,047,214

〈支出の部〉	
郵便局払出	¥ 350,000
(内訳)	
理工学会年会費	¥ 3,000
名簿原稿編集料	¥ 20,000
稲化会名簿第11版郵送料	¥ 230,210
事務経費(ラベル他)	¥ 9,470
アルバイト代(10名×¥5,000)	¥ 50,000
12/21引出分使用額残額(現金)	¥ 37,320
名簿第11版・会報16号印刷代	¥ 351,750
払込手数料 53件	¥ 3,740
次年度繰越 (あさひ銀行)	¥ 154,546
(郵便局)	¥1,187,178
合 計	¥2,047,214

2002年度

〈収入の部〉	
前年度繰越金(郵便局)	¥1,187,178
銀行普通口座解約/利息	¥ 154,554
現金	¥ 37,320
会費(¥3,000*49名)	¥ 147,000
(¥30,000*2名)	¥ 60,000
合 計	¥1,586,052

〈支出の部〉	
払込手数料 28件	¥ 3,590
会費払込票印字代	¥ 3,100
アルバイト(名簿修正)	¥ 20,000
総会準備金	¥ 200,000
次年度繰越金	¥1,359,362
合 計	¥1,586,052

【3】 会費納入についてのお願い

会費を本号とともに送付しました郵便為替用紙を用いて納入してください。2年毎の連絡となりますので、2年分の納入をお願い致します。年会費は、正会員が1500円、学生会員が750円です。また、終身会費は30000円です。

前記会計報告にありますように納入率が劣悪の状態です。本格的に稲化会事業を進めるためには、納入率の向上が必要ですので、皆様のご協力をお願いします。

【4】 稲化会のホームページ開設と E-Mail アドレス

稲化会ホームページ www.chem.waseda.ac.jp/touka/ob.html を開設し会員への連絡や意見交換の場として皆様に利用して頂くべく、整備を進めています。また、稲化会の E-Mail アドレスは toukakai@chem.waseda.ac.jp です。近況報告、稲化会へのご意見、住所変更などの連絡にドシドシ利用してください。

【5】 稲化会のホームページ解説と E-Mail アドレス

別途の住所録 CD-ROM からお分かりのように、住所不明の会員が多数居ります。皆様の周辺の方の住所が分かりましたら稲化会迄 E-Mail にてご連絡ください。また、皆様の E-Mail リストを整備していくために、皆様の E-Mail 番号をお知らせください。(会費納入に際して郵便振替用に E-Mail 番号の記載して下さいでも結構です。)

【6】 稲化会役員

2003年度12月現在の稲化会役員は下記の通りです。

会 長	長瀬 裕		
副会長	鹿又宣弘	中田雅久	
監 事	高橋博彰		
評議員			
伊藤 紘一	高橋 博彰	古川 行夫	
柴田 高範	多田 愈	中井 浩巳	
中田 雅久	新田 信	松本 和子	
石原 浩二	長瀬 裕	鹿又 宣弘	
矢野 圭一	中田 匡	小又 昭彦	
井上 国見	宮田 信郎	百瀬 浩	
小林 憲司	宮野 浩行	伊藤 信一	
塚田 光男	境之 佳樹	小西隆太郎	
朝倉 徹也	泉 千英子	神崎 昌之	
五十嵐 庸	国松美由紀	上杉 有紀	
森川 毅	野口 由木		
編集理事	伊藤紘一		
会計理事	石原浩二		
庶務理事	松本和子		

〈編集後記〉

稲化会報17号をお届けします。2003年度は化学科創立30周年の節目の年でしたが、創設以来科の発展のために活躍され、やさしく磊落なお人柄で皆から慕われた多田愈先生が定年を待たずに退職されるさびしい年にもなりました。ただし、先生はお元気で退職後も非常勤講師として理工学部勤務されることになっており、稲化会の発展のためにもご尽力下さるとのことです。卒業生の皆さんもお暇なときには先生をたずねて、稲化会の楽しいサロンを形成して下さい。多田先生の後任には、岡山大理学部で助教授をされていた柴田高範先生をお迎えしました。化学科の学生への最初の挨拶で、化学科に対する愛を熱っぽく語られていたのが印象的でした。先生は20世紀最大の有機化学者の一人である Corey 博士（ハーバード大学有機化学教室）お墨付きの優秀な化学者です。大いに活躍されることでしょう。

卒業生の皆様のますますのご発展を祈っています。

（伊藤記）